



オーガスト
オフィシャルハンドブック
2014年春号

大図書館の羊飼！
Dreaming Sheep
a good librarian like a good shepherd after and another stories

AUGUST

P R E F A C E — ま え が き

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。

何度目かの皆様、いつもご愛顧頂きありがとうございます。

2014年3月28日に、無事『大図書館の羊飼い -Dreaming Sheep-』を発売することができました。

お買い上げいただいた皆様、ありがとうございます。私たちがソフト制作を続けられるのも、皆様のおかげです。もしよろしければ、オフィシャルサイトのユーザー登録ページから、またはソフト同梱の葉書にて、ご意見ご感想をいただければ幸いです。

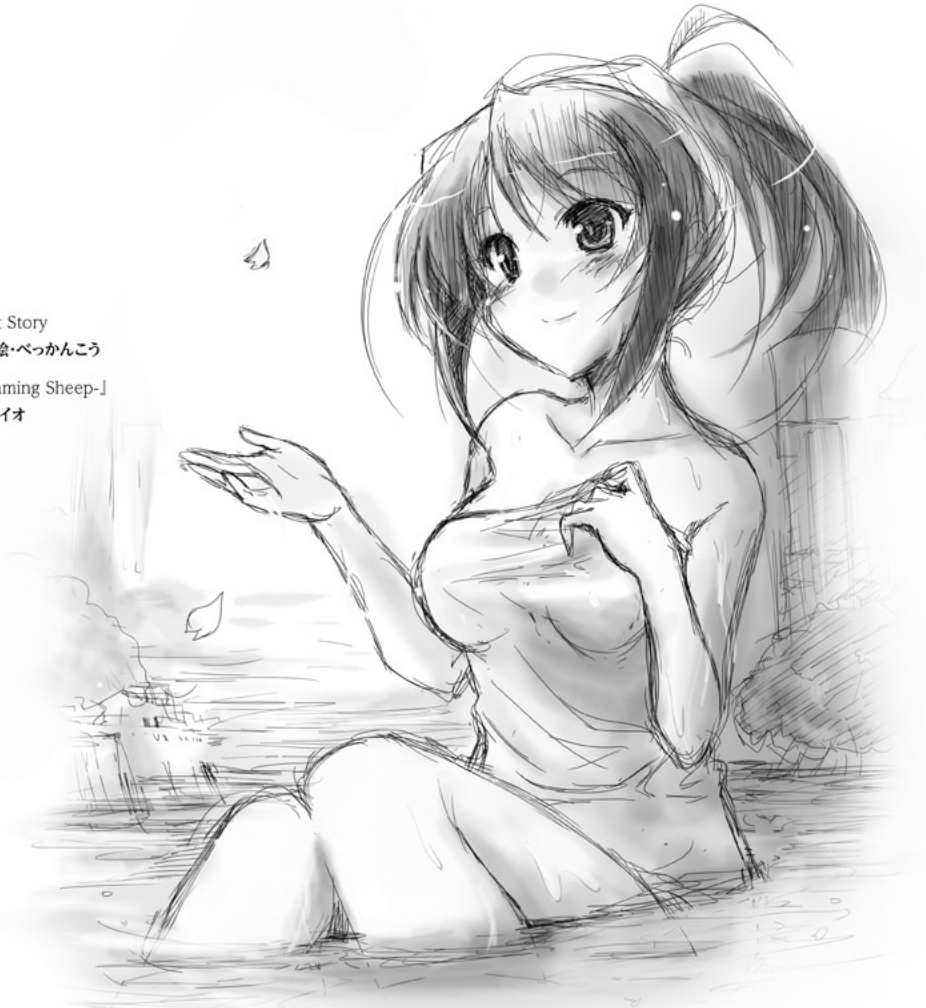
さて、本小冊子は初めて開催されるイベント「Character1」での配布が初出です。このイベントは2014年4月29日に、同人誌即売会である「COMIC1」と同時に開催されるキャラクターコンテンツ総合見本市で、東京ビッグサイトにて開催されます。初開催なので、当然私たちオーガストが出席するのも初めてとなるのですが、新しいイベントがこれから盛り上がりていきますよう祈念するとともに、残暑見舞いと同時に当冊子をお受け取りになった皆様も、お時間がございましたら次回以降お運び下さいませようお願い申し上げます。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみ下さい。

2014年春 オーガスト /ARIA 拝

CONTENTS

- 3 …… 『大図書館の羊飼い』Short Story
一日女神 榊原拓 /挿絵・べっかんこう
- 7 …… 『大図書館の羊飼い -Dreaming Sheep-』
発売記念漫画 夏野イオ
- 10 …… スタッフ対談
- 11 …… あとがき



一日女神

榊原 拓

「ちゃっちゃらっちゃー、ちゃーららー」
お次は大泥棒三世のテーマ。
しかも結構、激しい動きが多い。
俺の部屋はもうアルプススタンド顔負けのチア天国だった。

「あー、軟式野球部の応援って言ってたっけ」
「ええ。当日は他にサッカー、硬式野球、バスケット、ラクロス、カポエイラ、セパタクロー、将棋、囲碁、オセロなどなどの大会が重なってるそうです」

将棋をチアが応援しても、ひたすらシニールだが。「振り付けて、今から覚えられるのか？」
「簡単なものだけ覚えればあとはその繰り返しなんです。ま、ポジションも端の方ですし」
「その割にユニフォーム着て練習とか、気合い入ってるよな」

「やっぱ失敗したら恥ずかしいですよ」
学園の制服と同様、赤と白を基調としたデザイン。まあこれはいい。
何より気になるのは、チアのユニフォームは布地が少ない気がするからだ。
おまけに生地も薄い。

★

今は俺の目の前だけで繰り広げられているチア佳奈ダンスだが、当日は大勢の人が見ることに。くっ……ただでさえ魅力的な佳奈なのに、チアリーダーとして踊ったりしたら男共が放っておくはずないじゃないか。

「ちなみに、チア衣装のスカートの下ってどうするの？」
「今はスパッツ型のも多いみたいですけど、私はフリル付きのアンスコを借りる予定です」
「ふーん」

「不肖鈴木、精一杯やらさせていただきます！」
学園で最も華やかなチアリーダーディング部から、図書館に依頼があった。
地方大会決勝クラスの日程が各運動部で奇跡的に重なった日。
大量の部員を抱えるチア部も、ついに人手不足に陥ったらしい。
図書館の女子でその日のスケジュールが空いていたのは、佳奈だけだった。

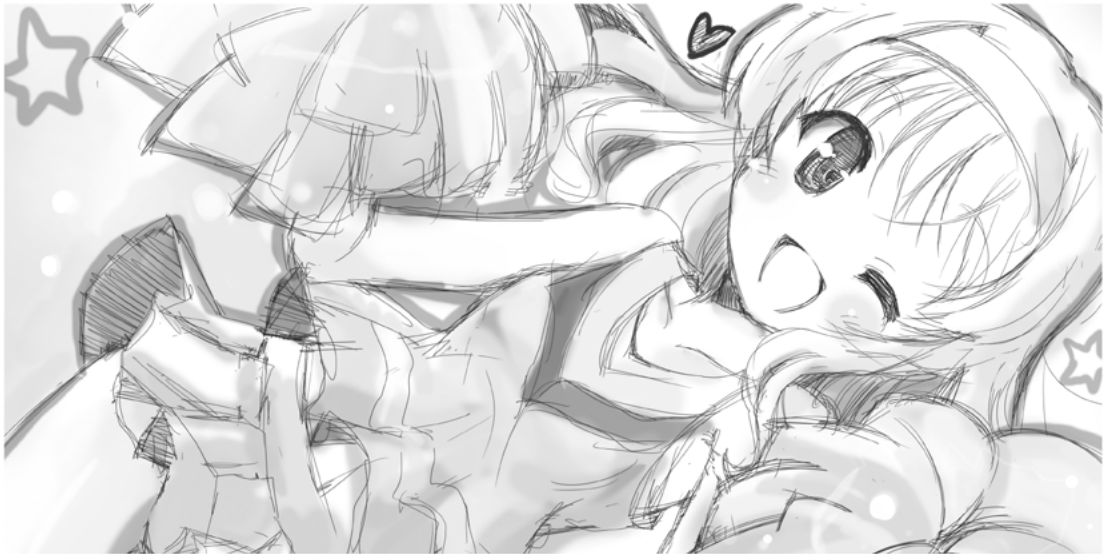
「ちゃっちゃつ、ちゃーらっちゃー」

佳奈が俺の部屋に住むようになって数ヶ月。はじめの頃は浮ついていたものの、同居人のいる暮らしにも相当慣れてきた。

「情熱の大陸っぽい音楽を口で歌いながら踊る同居人は、あまり見慣れていない。
しかもチアリーダーのユニフォームを着込んでるとききた。
おかげで、さっきから視界にちらちらと佳奈の脚が入ってくる。」

「いかな読書魔人の俺と言えど、これでは読書に集中できない。」

「ふーん」
ちよっと想像してみる。
ヒラヒラと舞うスカートの裾。そしてその中身。公開していいものじゃない。



「あらあら、やっぱり気になります？」
ニヤニヤと俺の顔を覗き込んでくる佳奈。
そりゃ気にならないと言ったら嘘だ。

「見られるのが前提の、見られてナンボの衣装だろ。別に気にならないよ」

しかし口では強がりを書いてみる。
これは佳奈のにやけ顔が悪い。

「京太郎さんはいんですか？」

「何がだ」

「私のこの美脚が、青空の下、大勢の人の目に晒されちゃうんですよ」

ちらっ、ちらっ、と俺に視線を流してくる佳奈。いいか悪いかと言われれば、彼氏としてはあまり良くはない。

もちろん佳奈が期待してる答えも分かる。

だが、彼氏として独占欲が強いとか狭量だとか思われるのもちよつとな。

ここは広い心か。年上だし。

精一杯の笑顔で余裕を見せつつ言う。

「アプリオでウエイトレスやつてるときも一緒さ。いろいろ経験にもなるし、楽しんできなよ」

「ぶー」

頬を膨らます佳奈。

「つまらないですー」

「束縛強い彼氏がいいのか」

「そういうことじゃなくてですわねー。バランスと言いますか……あまり構ってもらえないのも寂しいという微妙な女ゴコロってやつですよ」

「わかったわかった」

ベッドに腰掛けた俺の隣に、佳奈が並んで座る。佳奈の吐息が首筋にかかる。

「じゃあ京太郎さん、お願いがあるんですが……」

「何でもござ」

「……これから柔軟体操するんで、背中押しして

らえませんか」

「はいはい」

開脚し、上半身を前に倒す佳奈。

その背中を押してやる。

「あいたたたたつ、たつ」

「もつと行けるか？」

「あつ、ダメです、きよつ、京太郎さんつ、それくらいで……いたたたつ」

「まだまだ」

「やつ、やめ……つ、いたたたたつ！ さつ、裂

けます、股が……つ！」

「ふう……今日はこれくらいにしておくか」

あううう、とうめき声を上げていた佳奈が、こちらを獣の目で睨む。

「次は京太郎さんの番ですつ」

「ぬつ、お、あ、あたたつ、あたたたたつ！」

「ほらほら、こんなに固いじゃないですかー」

「ててつ、すつ、すまんつ、俺が悪かった……つ！」

その後も、許してー、きゃー、などと賑やかなチ

ア佳奈と共に夜は更けていった。

★

大会当日。

朝には、快晴の青空が俺かつてくらい爽やかな笑顔で佳奈を送り出したあと。

俺も大会会場に行ってみることにした。

やはり気になるものは気になるのだ。

軟式野球部の大会は河川敷にある小さな球場で行われており、バックネット周辺にだけ設けられた応援席からは両校の関係者が声援を送っている。

人数は少ないものの、応援団とチアの姿も見て取

れた。

「お」

応援席の端の方に、チアリーダー姿の佳奈の姿をさっそく発見。

トランペットに合わせて、本物のチア部の人によって客席を盛り上げている。

「かっせーかっせー！ や・ま・だー」

雲一つない空の下、チアユニフォームの佳奈に応援される山田が羨ましい。

しかし……アレだな。

いつもは文章を書いたり一緒にテレビを見たりと俺同様にインドア派な佳奈だけど、こうして太陽の光と風の中で健康的な汗をかいている姿は、想像以上にかわいい。

さすがに慣れないせいか、ちよつと表情には硬さが残ってる気もするけど。

「かっせーかっせー！ こ・じ・まー」

山田はいつの間にか打ち取られ、佳奈は今度は小島を応援している。

試合を眺めつつも、俺は佳奈のチアダンスからも目が離せないでいた。

「……ん？」

ふと、鈴木を挟んで俺とちよつど反対側にいる男が持っているカメラのレンズが目に入った。

主にグラウンドの方を向いているのだが、気のせいか、ときどきこつちを向いているような気がする。

こつちというか、具体的には佳奈？

しかも無反動砲かかってくらい野太い望遠レンズをつけている。

あんなものが佳奈に向けられたら……睫毛の本数からお肌の角質ケアの巧拙までもが画面に刻まれてしまう。

そんな事態は、彼氏として断固許容できない。

よし。

よし。

よし。

よし。

よし。

よし。

よし。

よし。

よし。

よし。

よし。

よし。

よし。

よし。

よし。

よし。

よし。

よし。

よし。

俺は、バッターボックスの小島の親友もかくやの勢いで客席をかき分け歩を進める。

「すんませんすんません、とチョップスタイルで長椅子にスペースを空けてもらい、カメラ男と佳奈の間に陣取った。」

「かっせーかっせー！ こ・じ・まー！」

そして佳奈に合わせ、立ち上がって声を張り上げる。

「見られるのが前提の、見られてナンボの衣装だろ」なんて言ったけど、チア佳奈の一瞬のシャッターチャンスが永遠にネットに出回ったりするのは阻止しなくてはならない。

「かっせーかっせー！ い・し・ま・るー！」

なんなら小島だけではなく石丸の親友でもある俺。

もう完全に軟式野球部の関係者の体で、声援を送り続ける。

程なく、カメラ男のレンズがこちらを向くことも無くなったように思えた。

俺の杞憂による完全な空回りだったら恥ずかしいが、とにかく佳奈を守るという目標は達成された。

「あれ、京太郎さん？」

「お、おう」

ま、ここまでガチで応援すれば、当然佳奈にも見つかるとは思うな。

「いやー、まさか本当に来てくれるなんて思ってませんでした」

「まあ、いい天気だったし」

石丸が打ち取られ、相手校の攻撃となった。

他のチアも佳奈も、次の回まで応援から開放されるらしい。

俺と佳奈は応援席の一番端に移動し、並んで腰掛けた。

「でも、こうして来てもらえるって、思ってたより嬉しいものですわねー」

しみじみと頷いている。

「そんなにか」

「チア部の皆さんもよくしてくれるんですが、やっぱり知り合いが一人もいないとちょっとアウェイ感ありますよ」

ちよつとホツとしたような笑顔の佳奈。

言いたいことはわからなくもない。

ただ、俺にはもつと伝えたいことがあるのだ。

「それよりさ、チアの写真撮ってる奴とかいるかもしれないから、その辺気をつけた方がいいんじゃないか」

「あー、いらつしゃいますねえ。特に新人は狙われるからって話はチア部の方から聞いてます」

「ネットに上がったりしたらどうするんだ」

「まあ、嬉野さんに頼めば何とかしてくれるかなーって」

確かに彼女なら何とかしてくれそうだが。

「それよりどうです、京太郎さん」

「何が？」

「もー、私のチアアガール姿に決まってるじゃないですかー。自分ではそこそこなってるんですけど」

もちろん普段から佳奈は最高だ。

しかしチアのユニフォームを着た佳奈はさらにその上に行く。

「そこそこ」などと謙遜はしているが、新たな魅力を存分に見せてくれている。

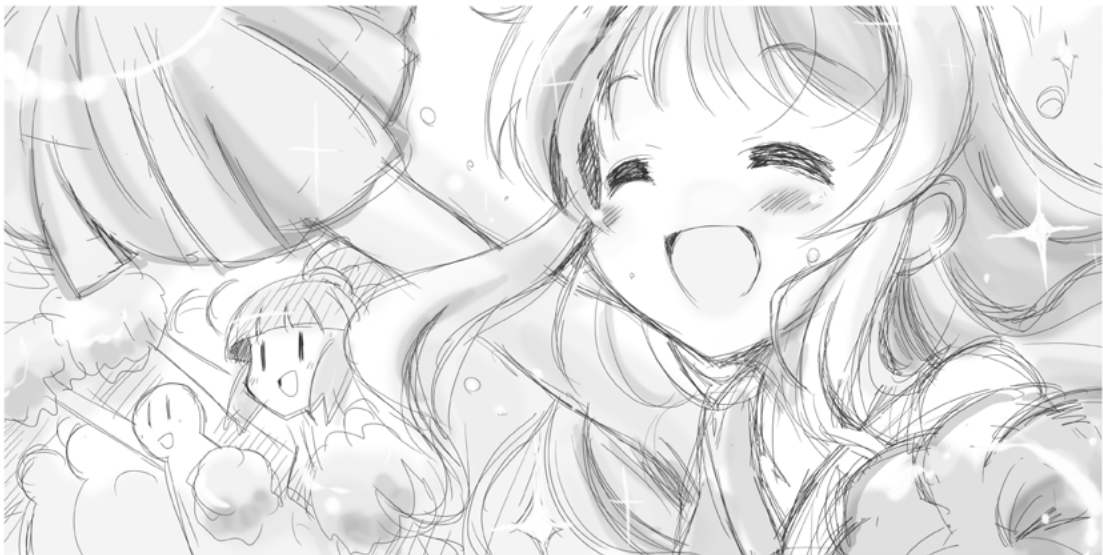
俺は正面から佳奈の瞳を見据えた。

「すごくかわいいよ」

「えっ」

「ほかの本物のチア部員より何倍も輝いてると思う」

もちろん彼氏の欲目もあるだろうけど。



「ちょっと、どうしちゃったんですか？京太郎さん、や、やだなあ、あはははは……」

ストレートな俺の感想に真っ赤になってバタバタと手を振る佳奈。

この仕草もたまらなくかわいい。

「だからさ、確かに嬉野さんに頼めば何とかなるかも知れないけど、いろいろ気をつけろよ」

「わかりました、肝に銘じますっ」

「あと、強いて言うならまだ表情が硬いかもしれない。学食スマイルを思い出せ」

「なるほど」

ここで汐美学園側の守備が終わり、攻撃が始まる。佳奈もふんす、と鼻息を荒くして立ち上がり、チアの定位置へ戻っていく。

「京太郎さん、見てて下さいね。千円の値段がつく精鋭アプリオウエイトレスのスマイルを！」

「おう」

初めて佳奈と出会った時のことを思い出す。

俺と高峰でアプリオに行った時、まだ初心者マークをつけた新人バイトウエイトレスとして、俺達の注文を請けたのが佳奈だった。

高峰の「スマイル」というベタな振りに見事に反応し、キラッキラ笑顔返してきたのだ。

そして今チアリーダーとなった佳奈は、あの頃と変わらぬキラッキラの笑顔をスタンドから振りまいていた。

——汐美学園軟式野球部はその回火を噴くような猛攻を見せて逆転し、そのまま勝利を収め、全国大会へと駒を進めた。

★

試合終了後、野球部員が観客席に向かって並び、帽子を取って応援ありがとうの一礼。

大いに盛り上がる観客席。

チアの一員として、その中心で笑顔を弾けさせているのが俺の彼女の佳奈だ。

眩しい。

彼氏として、ちょっと誇らしい気持ち胸を満ちた。

……その後、帰り支度を終えたチア部に、軟式野球部員が御礼の挨拶に来た。

俺はちょっと離れたところから様子を窺う。

「君たちのおかげで勝てた。勝利の女神だ。ありがとう」

確かに、今日は佳奈の笑顔が勝利を呼びこんだように見えたなあ、などと試合を思い返していると

おい。

サラッと、佳奈になんかメモ渡したヤツがいるじゃないか。

しかも超さわやかに。

「これアドレス。よかつたら連絡してね。全国大会でも絶対キミに応援して欲しい」

佳奈は佳奈で、赤くなつてわたわたしてる。

軟式というより軟派な野球部員は、すぐに他の部員と一緒にバスに乗って会場を去って行った。

「あ、京太郎さん」

「さすがスポーツマンは爽やかだな」

「見てました？」

「まあ、見ることもなしに目に入ったというか」「いやあ、こういうのって正面から来られると、意外ととっさに対応できないものなんです」

てへへ、と頭をかく佳奈。

「ま、ウエイトレスの時の客あしらいとは勝手が違うのは分かるけどさ」

「えーと、多分さっきの人も私のことチアリーダー部員だと思ってるはずなんで、どうしたらいいのかチア部の人に聞いときますね」

「ああ、それがいいだろ」

「あと、帰るのは打ち上げに行つてからになりますんでー」

チア部の先輩と呼ばれ、佳奈は小走り集団に合流した。

★

ま、佳奈のことだし心配はいらないと思うけどさ。一人で部屋に帰ってから、俺はベッドでごろごろしながら悶えていた。

やはり佳奈の魅力は、世の男共に見つかつてしまつたか……！

そりゃそうだ。

最初から輝いてたし、途中からはアプリオスマイルまで炸裂していたわけ。

……目を閉じれば、瞼の裏に浮かび上がるチア姿の佳奈。

躍動する筋肉、日光を健康的に反射するきめ細かい皮膚、飛び散る爽やかな汗、そしてとびっきりの笑顔。

今日は、なぜチアガールが存在するのかを思い知らされた。

本をいくら読んでも、やつぱり現物を見ないとわからないことはある。

あんな応援されたら、そりゃいつもの120%の実力が出ちゃつたりすることもあるだろう。

「勝利の女神」なんてのも、あながち過剰な表現じゃなかつたりするのもかも……。

そんなことを考えながらエンドレスでごろごろしている。

ガチャ

鍵を回す音、続いて扉が開く音。

「ただいま帰りました〜」

「佳奈?」

玄関まで迎えに行く。

帰ってくる予定の時間よりまだ早いお早いが。

「途中で抜けて帰って来ちゃいました」

靴を脱ぐと、ぽふっと俺の胸に倒れ込んでくる。

「ん、おかえり」

そのまま軽く抱きしめ、頭をぼんぼんと叩く。

「いやー、疲れました」

「お疲れさん。今日は輝いてた」

「どーでしたしよーか」

部屋に移動すると、床にべたんと座り込む佳奈。

「打ち上げも楽しかったんじゃないか?」

「んー……、楽しくはなかったですかね。ちょっとキラキラというか、ギラツギラの世界すぎますね。この鈴木には」

そう言っ佳奈は、ベッドに腰掛けた俺の膝に、頭をもたれさせた。

「落ち着きます……やっぱり寛さんがいる、この部屋が一番ですよー」

目を閉じる佳奈。

嬉しいことを言ってくれる。

俺は佳奈の髪を梳くように撫でた。

「あー、気持ちいいです……」

「あー、気持ちいいです……」

「あー、気持ちいいです……」

「あー、気持ちいいです……」

佳奈も、安心しきった表情で俺が撫でるに任せていた。

静かな部屋に、二人の落ち着いた呼吸音だけが響く。

……いつまでもこうしていたかったが、俺は、佳奈の髪をわしわしと掴んだ。

「ほら佳奈、このままだと寝ちゃうぞ。シャワー浴びてこいシャワー。汗かいたる」

「わ、そうですね」

慣れない一日を過ごしたせいか、ふらふらで浴室に入る佳奈。

「ざっと汗を流してすぐに出てきたと思ったら、ベッドに倒れ込んだ。」

「今日はもう寝ます……」

「あー、その、メアドはどうなった?」

「よくあることだそうで、個人的に興味が無かったらスルーでいいそうです」

「うん」

「もちろんスルーですよ」

俺の手を握ってくる佳奈。

その手は、指先まで体温が高く、ほかほかしている。

「……そっか」

「おやすみなさい……」

小さく胸を上下させ、すぐに規則正しい寝息を立て始めた。

俺はそつと左手でタオルケットをかけてやる。

右手は佳奈に握られているので動けない。

やりきった、という満足げな疲労が浮かぶ寝顔だ。

俺はと言えば、そんな寝顔を見ながら、一つ強く誓ったことがある。

もしまた図書館にチア人員不足の依頼が来たら、今度は土下座をしてでも、他の部員に担当してもらおう。

傍から見れば見事なバカアップル、親バカならぬ彼氏バカなんだろうけど――

佳奈は俺一人の女神でいてくれればいい。

そんなことを考えていた。

END





大図書館の羊飼!

Dreaming Sheep

a good shepherd like a good shepherd after and another stories

発売記念漫画 夏野イオ



あ、やっぱ
恥ずかしいんだ

カアア
カアア



私だって
イチャイチャ
したぞ!

ちよつとちよつと
私と京太郎君も
ラブラブだよ!?

わたし
わたし
わたし

わ!
わたしも

それは…
私と京太郎の愛の記録!

こ…小太刀
姐さん!!

いつからそこに



私達だって!

よろしく願います!

私も居るよっ
楽しんでね!

プレイ感想など
待ってます!

べっかんこう(べ) :さて対談の時間がやって参りました!

榊原拓(榊) :今回はCharacter1というイベントで配布する小冊子です。

べ:新しいイベントですね。盛り上がってくれるといいのですが。

榊:僕らもCharacter1が盛り上がるように頑張っていきましょう。

べ:おー!

榊:さて、『大図書館の羊飼い-Dreaming Sheep-』(DS)が発売されたわけですが。

べ:まずはお買い上げいただいた皆様、ありがとうございます。プレイの感想をお寄せ頂ければ幸いです。

榊:読みますよー!

べ:読みますよー!!

榊:本気でスタッフがみんな読みますので、是非是非。

べ:今のところ、ざっとDSのご感想を読んだ限りでは楽しんで頂けているようで何よりでした。

榊:個人的には、本編であれだけ敵役だった多岐川さんの評判が結構良くてほっとしています。

べ:たしかに心配でした。それだけ、本編をプレイしたユーザーさんが図書部の部室を好きになってくれたからだとはいえるんですけど。

榊:ですね。それはそれでありがたい話です。

べ:しっぽデイズのキャラたちも受け入れてもらえてるようで良かったです。

榊:最初はコミケ売り単発の予定だったんですが、その後多くのお声を頂いて一般販売もすることになったので、個人的には逆にDSに間に合って良かったなと。

べ:DS開発当初はまだ産まれてませんでしたからね。

榊:言われてみればそうでした。長い付き合いになったものです。

べ:そうそう、告知など。今のところまだ確定ではないんですが、DSとしっぽデイズの曲を合わせた軽いサントラのようなものを夏コミ合わせで作ろうかなと考えています。

榊:他にも何か面白いグッズを作れないかなと検討中ですので、こちらは軽くご期待下さい。軽く。

べ:何も無かったら、「ああ、コストか納期かその他の何らかの理由があったのかな」と静かにスルーして下さい……。

榊:というか、検討したりサンプル作製までやったのに、結果、内部的に没になるグッズ案ってそこそこあったりして。

べ:できるだけ皆様の要望にお応えしたいと思うので、こんなグッズが欲しい!というご意見ご提案も頂けると嬉しいです。

榊:お応えできないことが多くて心苦しいのですが、通販の備考欄とか案外読んでますよー。

べ:さてさて、新作を発売したということは更に次が気になるという方もいるかと思うんですが。

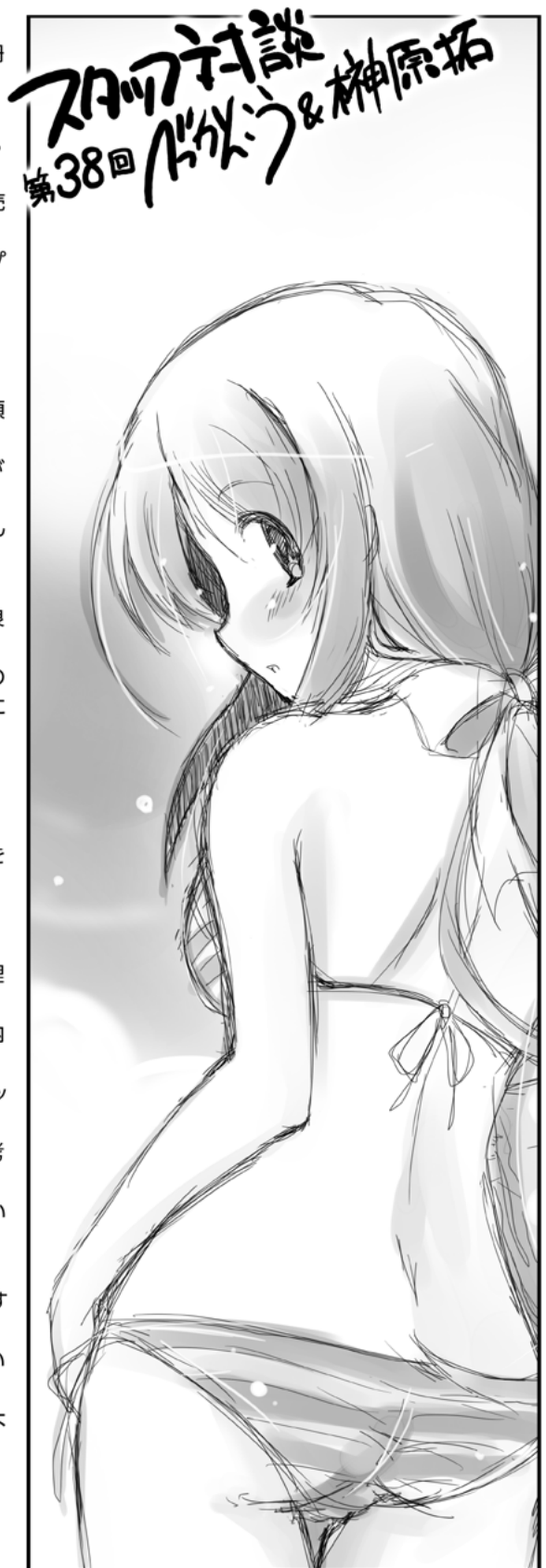
榊:現在、着々と企画が形になりつつありますのでご期待ください!

べ:内容はまだ言えないんですが、ちゃんと次回作も動いてますよーということ。

榊:あまり開発期間が延びてお待たせしすぎないように、いろいろ工夫していますよ。

べ:新作は動いてますが大図書館もまだまだ続くので、どうぞよろしくお願いします。

2014.4.7 14:30 社内にて



POSTSCRIPT - あとがき

オフィシャルハンドブックをお読み頂き、ありがとうございました。
お楽しみ頂けましたでしょうか。

現在、開発室では次のプロジェクトの企画が練られている真っ最中です。

次のプロジェクトがどういったものになるのかまだここに書くことはできないのですが、あまり遠くないうちに皆様にお知らせできるよう鋭意開発を進めて参りますので、ご期待下さいませ。

『大図書館の羊飼』の世界は、Dreaming Sheepで終わることなくまだまだ展開して参りますので、こちらも同様にご期待いただければ幸いです。

それでは、今回はこの辺で。

今後ともオーガスト/ARIAをよろしくお願い致します。

2014年春 オーガスト/ARIAスタッフ一同



オーガストオフィシャルハンドブック
2014年春号

※禁無断転載・無断複製

最新情報満載!

オフィシャルホームページにぜひお越し下さい!

<http://august-soft.com/>

<http://aria-soft.com/>

大図書館の羊飼!
Dreaming Sheep
a good librarian like a good shepherd of her and another stories



大図書館の羊飼!

Dreaming Sheep

a good shepherd like a good shepherd after another starts

オーガストオフィシャルハンドブック
2014年春号

